

## CALLについて (3)

### － 英語e-Learning科目の教材と、教材開発プロジェクトについて －

横 村 (鶴木) 栄 美

#### 0. はじめに

本学では、2008年度（平成20年度）より、英語科目の半期化に伴い、e-Learning科目を導入しました。それとほぼ並行して、本学独自の英語e-Learning教材開発プロジェクトを立ち上げ、Newton社との共同開発を進めています。本稿ではe-Learning科目の教材についてと、プロジェクト立ち上げの経緯と作成教材について、概要を述べていきます。

#### 1. 英語e-Learning科目の教材について

e-Learning科目開講当初から、本学にはアルク社のe-Learningソフト『ALC NetAcademy2』を導入しており、1年生科目は、このソフトを使って学習を進めていました。しかし、このソフトのみで学習を進めていたため、このソフトだけでは学習が足りない、内容的に飽きてしまう等の問題があり、今年度は、このソフトに加えて、小樽商科大学で自作しているe-Learning教材（基礎コース）を導入しています。

2年生科目では、ニュートン社の学習ソフト『TOEIC Bコース』を使用しています。このコースは50のサブコースで問題数が1万8千問以上あります。このソフトは市販されていますので、誰でも購入して学習することが可能です。<sup>1</sup>

#### ○教材について

##### ・1年生科目『英語ID』

小樽商科大学オリジナル教材 「基礎コース」 平成22年度前期  
後期は「1年生コース」

ALC NetAcademy2スタンダードコース 導入は平成17年度

1年生の授業用教材としての使用は平成20年度より

今年度前期は「TOEIC演習」コースのみ使用

##### ・2年生科目『英語IIA2 / IIB2』

Newton社 TLTソフト TOEIC Bコース 平成21年度より

成績評価ですが、1年生科目は、定期試験としてTOEIC IP Testを課しています。通常の学習は、今年度前期に関しては、Newtonソフトの基礎コースを12レッスン中7レッスン終えること、アルクTOEIC演習を20ユニット中7ユニット終えることが成績評価の条件です。

2年生科目は、Newtonソフトのサブコースを7つ以上終えること（習熟証明番号を7つ以上取ること）、小テストを3回受けること、定期試験を受けることを、成績評価の条件にしています。

過去2年のTOEIC IP Testの本学の平均は、480から500点です。英語IDを履修している学生で400点以下（成績評価で「不可」）のスコアを取った学生は、履修者全体の10から15%程度でした。

### ○成績評価について

- ・『英語ID』：Newton基礎コース、アルク（TOEIC演習）とも、7レッスン以上を終えることと、TOEIC IP Testで400点以上のスコアを取ること（TOEIC IP Testは学期末に実施、『英語ID』履修者は定期試験として受験する）
- ・『英語IIA2/IIB2』：Newtonソフトのサブコースを7つ以上終えること（習熟証明番号を7つ以上取ること）、小テストを3回受けること、定期試験を受けること

TOEIC IP Testは、平成20年度より、本学が賛助会員となり、学務課や英語教員が準備や試験監督等を担当していました。今年度より、卒業生の組織である「緑丘会」より、大学生協への試験監督委託料と、1年生分の受験料の一部を負担していただけることとなり、それに伴い、年2回の実施から年4回に、回数を増やして実施できることとなりました。

## 2. 英語 e-Learning 教材開発プロジェクトについて

独自開発教材を作成する流れになったのは、既存のソフトでは本学学生の学習に不十分な問題が出てきたからです。既存ソフトはすでに出来上がっていますので、目的に合ったものを選択すれば、あとは学生に指示を出して学習させることが可能です。しかし、小樽商科大学の学生の傾向に合うものや、大学や社会が求める人材を育てるということも考えると、もっと専門的であったり、多種類、多レベルの設問が必要となってきます。

### ○既存ソフトの長所、短所

- ・長所：すでに出来上がっている教材なので、目的に合った教材を選択し、学習させることが可能
- ・短所：それぞれの大学の学生の傾向に合うものを見つけるのは大変（たとえば、ビジネス場面での初級レベルの単語の使い方など）、多レベル、多種類のソフトをそろえるにはお金がかかる

#### 2-1 プロジェクト立ち上げの経緯と詳細

プロジェクト立ち上げ以前は、個々の教員でTOEICに関連する教材を用いての授業の展開、それに伴う教材の作成などが行われてきました。平成17年度に、LL教室がCALL教室となり、それと同時に、英語e-Learning教材として、ALC NetAcademy2が導入され、いくつかの授業やゼミで使用されてきました。

その後、ALC NetAcademy2とTOEIC関連の対面授業とを組み合わせた科目の設置などを経て、平成20年度より、英語科目の半期化（1単位化）、全学的なTOEICの導入に伴い、e-Learningクラスを開講しました。

独自教材としては、携帯電話を使用して、単語の学習ができる、アルク モバイルアカデミーでの、ビジネス場面での基本的な英単語の使用についての設問を、試験的に配信しました（平成19年夏、20年春）。

プロジェクト立ち上げ後は、平成20年度より、大学、文部科学省の財政的支援で独自教材の作成が可能になりました。Newton Bコースの導入時に、Newtonのスタッフの方とお話しし、Newton社との共同研究・共同開発の話が出ました。

教材の作成は校正も含め、英語教員全員で担当し、システム、ハード面はNewton側が担当しています。

プロジェクトには、英語科教員の他に、プロジェクト専任の助教と事務補佐員が常駐し、その他に、学生アルバイト数名がおります。

## 2-2 Newtonとの共同研究について

Newtonとの共同研究については、ALC NetAcademy2のみの使用では、教材の少なさ、予算的な問題で他コースの導入やバージョンアップが難しい等の問題があり、新たな教材の導入を検討していたところで、Newton学習ソフトの導入を決め、同時に、教材作成に関する共同研究、プロジェクトとしての立ち上げが実現しました。

## 2-3 作成教材について

作成教材は、本学教員がオリジナルに作成した問題を使用しています。これは、元になるデータがある場合は、固有名詞や日付等を変え、追加修正して使用します。

蓄積した問題は、教室でも利用できるようにFD (=Faculty Development) 用Data Baseとして作成し、ペーパーでの利用もできるようにします。

音声に関しては、Listening問題ばかりではなく、TOEICのPart5の語彙問題などにもナレーションを使用しています。基本的に、作成している教材には全て、ナレーションをつけています。ナレーションは、専門の会社に依頼して作成してもらっています。

作成しているコースは今のところ3つです。基礎コース、1年生コース、2年生コースです。ディクテーションは、これらのコースのレッスン13として、加えています。これらのコースの他に、ハーフテストを作成しています。

### ○作成教材について

基礎コース：TOEIC 300-500点（一部200点のものも含む）

1年生コース：TOEIC 400-600点

2年生コース：TOEIC 500-700点（一部800点のものも含む）

- ・半期12レッスン、1レッスン60-80問
- ・ディクテーション（レッスン13として、各コースに追加）
- ・ハーフテスト

## 2-4 教材作成の流れ

教材作成の流れは以下の通りです。下線部分は本学側で担当する分、囲み部分はNewton側が担当している部分です。

### ○教材作成の流れ

テキスト等から集めた問題データを使って、オリジナル問題をWordファイルで作成

↓

作成した問題の校正（英語科教員）

↓

ナレーション録音依頼、Newton社へ送付



データベース用ファイル (Access/Excelファイル) に変換



Newton社で校正とデータ化、ナレーション音声ファイルとともに学習ソフトのサーバへ  
入れる



画面上でのチェック、修正



完 成

例として、文型を答える問題 (Part10) を示します。基本となる文を書き換えていきます。  
Part名、分類番号等は、本学側で作成時につけている番号です。

(参考：教材の作成の流れ)

Part 10の問題作成：基本となる文

Christy has been driving this car for more than 10 years.

Newton方式のWord Formatへの書き換え

1) 分類番号

P10R021

2) 指示文

Choose the correct sentence pattern (1: S+V, 2: S+V+C, 3: S+V+O, 4:  
S+V+O+O, or 5: S+V+O+C) for each sentence.

3) 問題

Christy has been driving this car for more than 10 years.

4) 選択肢

(A) 3                      (B) 2                      (C) 1                      (D) 4

正答A ※正答を「A」にし、「B」以降は誤答を並べます。実際の出題時は選択肢が  
毎回シャッフルされて出題されます。

5) 解説: drive: SがOを前へ動かす>車を運転する

6) TOEIC 200

7) 項目:文法:文型

8) 場面:生活

9) その他: Proofread by

10) 基礎L 1

Scrambling問題は、一つの文を、2～3語ずつ区切ったり、1語ずつ区切ったりすることで、  
レベルを変えることが可能です。他に、上で示したPrat10のような穴埋め問題を、error

recognition問題としたり、長文から4択問題を作成したりしています。

## 2-5 設問について

設問は、基本的にはTOEICの出題形式に合わせていますが、その他に、並び替え、同義語・反義語、誤った用法の指摘、部分英作文等を作成しています。

コースによって、出題する設問の種類は変わります。

レベル分けですが、厳密に何か頼っているというのではなく、使われている語のレベル、文の長さなどから推測しています。

### ○自作教材について

- ・TOEIC形式のものに加え、並びかえ、同義語・反義語、誤った用法の指摘、部分英作文などを作成
- ・コースによって、出題する設問の種類は変わる
- ・コースのレベル分けは、設問で使用している単語や、文の長さなどのレベルから推測

## 2-6 教材作成に関して

教材を自作すると、設問の追加や修正、削除が常に可能です。時事問題等は特に、時期が過ぎれば修正の必要があります。また、1年生コースにある設問を基礎コースに使ったり、レッスンの中の設問を他のレッスンで使うなど、設問の移動が可能です。

こちらが望む出題形式ができないもの、たとえば、今であれば、文章中の整序問題や要約問題などについては、Newton側でシステムやプログラムを変更し、対応してもらうことになっています。

### ○教材作成に関して

- ・自作教材であるため、設問の追加、修正、削除等が常に可能
- ・問題のシャッフル、レベル（コース）を超えた出題が可能
- ・レベルごと、分野ごと、項目ごとの問題作成と分類が可能
- ・こちらが望む出題形式ができないもの：システム、プログラムの変更で対応

## 3. 今後の課題

プロジェクトは今年度も含め、3年続きます。この間に、さらにデータベースや設問、コースの追加をしていきます。当面の課題として、設問の種類を増やすこと、システムに関しては、サーバ管理やセキュリティなどがあります。

- ・問題作成に関して：写真描写問題、長文問題などの自作教材の作成、英作文のコンテンツなど
- ・システムに関して：サーバを学内に置く場合の、管理、学外アクセスの場合のセキュリティなど

## 4. 管理者として

少し話はそれますが、管理者として、感じることをまとめます。

e-Learningの学習管理は、一見、面倒そうですが、学習状況、達成率、学習時間等、必要な項目だけを確認できれば、成績評価はできます。学習ソフトはたいてい、パソコン画面上で学習状況を確認できたり、csvファイルやExcelファイルで履歴をダウンロードできますが、必要な項目がなかったり、複数のファイルをダウンロードする必要が出てきたりといった、面倒な問題があるのも確かです。実際に授業を担当し、管理画面を開いてみないと、学習ソフトが管理者側にとって使いやすいかどうか、判断できません。学習ソフトによっては、すでに出来上がっている以上、管理画面の変更はできないようです。ただ、発展途上の学習ソフトは、質問したことが実際にできないことであると、できるように修正してもらえ、といったことが可能です。

最良目になりますが、管理する側のことを考えてくれているe-Learningソフトこそ、よい学習ソフトといえるように思います。

## 5. おわりに

今後、e-Learning授業は、語学に限らず、増えていきます。実際、教育関係のセミナーなどでは、e-Learningの事例報告が多くなってきており、どの大学でも、自作教材や、独自の授業展開を目指しています。あるセミナーに参加した時に、「今の学生にではなく、その学生の10年後、20年後に目を向けて、そのために大学が何ができるかを考えていかななくてはなりません」と、発表された先生に言われました。今後、本学の英語e-Learning科目が学生にとって、単なる必修科目で終わらないよう、教材作成や開発を進めながら、考えていきたいと思えます。

## 謝 辞

本稿は、平成22年7月30日に北海学園大学で行われた「北海道学園大学CALL-FD研究会」での発表原稿を修正し加筆したものです。研究会を主催していただいた北海学園大学の上野之江先生をはじめ、参加者の皆様、また、原稿作成にあたり、ご協力いただきました本学英語e-Learning教材開発プロジェクトのスタッフの皆様にお礼を申し上げます。

---

<sup>1</sup> ただし、市販のソフトは6ヶ月の学習期限ですが、授業で使用しているものは、半期4ヶ月分の学習期限となっています。